



|                     |                                                                                                                           |
|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | コーパスに基づく日本語慣用句の研究 [論文内容及び審査の要旨]                                                                                           |
| Author(s)           | 呉, 琳                                                                                                                      |
| Degree Grantor      | 北海道大学                                                                                                                     |
| Degree Name         | 博士(文学)                                                                                                                    |
| Dissertation Number | 甲第12510号                                                                                                                  |
| Issue Date          | 2017-03-23                                                                                                                |
| Doc URL             | <a href="https://hdl.handle.net/2115/65444">https://hdl.handle.net/2115/65444</a>                                         |
| Rights(URL)         | <a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a> |
| Type                | doctoral thesis                                                                                                           |
| File Information    | Wu_Lin_abstract.pdf, 論文内容の要旨                                                                                              |



# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 呉 琳

## 学位論文題名 コーパスに基づく日本語慣用句の研究

本論文は、コーパスを活用した日本語慣用句の研究である。論文は序論・結論と、2部構成の本論からなり、別に参考文献一覧と添付資料3編を備える。以下、論文の構成に従い、要旨を記す。

序論では、日本語の慣用句について、これまでのところ多角的な視点から様々な分析がなされてきたが、慣用句の数量的側面と意味的側面との両特性を生かした研究は少ないことを指摘し、特に慣用句全体を対象とした数量的・意味的分析はまだ見受けられないことを述べる。そこで、慣用句の研究が盛んに行われてきたなかで、定量的研究と定性的研究が日本語慣用句の研究にとって重要な意味をもつことを指摘する。

そして、近年、コンピュータ技術の発達により様々なコーパスが構築され、過去には難しかった研究が現在可能になったことに触れ、本論文の目的を、(1) 慣用句の使用度数と意味分野の把握、(2) 現代日本語における基幹慣用句の選定、(3) 慣用句の通時的変化に見られる類型や要因の発見、(4) 個別の慣用句の意味・用法に関する記述、の4点に設定する。最終的には、これらの研究成果を日本語教育と関連付け、学習者向けの慣用句辞典記述への応用を目指す。

本論は、基本分析編と事例研究編という2部から構成される。第1部では、書籍と新聞コーパスにおける慣用句の計量的・質的分析を行う。第2部では慣用句の事例研究として、「鳥肌が立つ」と「足を洗う」及び「まんじりともせず」を取り上げ、使用実態調査を行う。

第1部第1章では、まず慣用句という用語の定義を述べ、形式的・統語的・意味的・音韻的側面から日本語慣用句の特徴を分析した。次いで、慣用句をめぐる先行研究を概観した。時系列に沿って確認すると、慣用句の研究は、1942年からの萌芽期（白石大二氏による一連の研究）、1970年代からの模索期（宮地裕氏をはじめとする慣用句の認定に関する研究）、1980年代からの成立期（慣用句の構成や品詞性に着目した研究）、1990年代からの成長期（慣用句の意味に関する研究や諸外国語との対照研究）さらに2000年以降の発展期（慣用句データベースの作成やコーパスを用いた慣用句研究）を経てきた。以上の確認ののちに、この章では、コーパスの研究史及び慣用句研究におけるコーパス利用の可能性について述べた。

第2章では、まず書籍コーパスから1,000句近くの慣用句の使用度数を調査した。度数順位に従い、ほとんど使わない慣用句からよく使う慣用句まで5つに区分し、各区分に含まれる慣用句の意味分野を観察した。その結果、全体としても各区分においても、用の類（動詞の類）そして「人間活動—精神および行為」という部門に含まれる慣用句が多いことが分かった。使用度数を考慮しつつ意味分野を詳細に記述することにより、各意味分野にどのような慣用句が分布するのか、それがどのくらい使用されるのか、を提示した。

そして、新聞記事を資料とし、同様の分析手法を用いて調査した。2種の調査結果に対し、相関係数を算出することにより、書籍・新聞という異なるレジスターによる慣用句使用度数の分布差異が見られるかどうか、を解明した。結果として、相関係数が0.7を超え、2つのデータには強い正の相関があることが示唆された。それに基づき、片方の資料における使用度数が多いと、もう片方の資料における使用度数も多く、異なるレジスター間の分布差異が見られないことを指摘した。

第3章では、書籍のうち、各ジャンルにおける各慣用句の使用度数を把握するとともに、全体的に使用度数が多くても少数のジャンルにしか高頻度で使用されない慣用句や、全体的に使用度数が

少なくとも複数のジャンルにわたって低頻度で広く使用される慣用句を確認し、複数のジャンルにわたって高頻度で使用される慣用句を基幹慣用句として選定した。基幹慣用句がその反対の立場に位置する慣用句、つまり、少数のジャンルにおいて低頻度で使用される慣用句と区別される背景に、慣用句の構成要素が大きく影響することを提示した。

第2部第4章では、「鳥肌が立つ」が1362年ごろ『河海抄』に寒さの表現として使われはじめ、1929年ごろまでには、寒さや恐怖の表現として認識され、1929年に小林多喜二『不在地主』に興奮の表現としてはじめて使われたことを明らかにした。寒さを表す用法を本来の用法、恐怖を表す用法をネガティブな用法、興奮を表す用法をポジティブな用法とするならば、新聞記事データベースにおいて、ポジティブな用法はおよそ1990年代以降ネガティブな用法を上回り、その後広く定着したことを明らかにした。

第5章では、「足を洗う」が通常、好ましくないことをやめる表現とされてきたが、1900年代島崎藤村『破戒』、『並木』に好ましいことをやめる表現として使われ始め、それ以降用例数が徐々に増加し、現在の新聞記事では、およそ3例に1例が好ましいことに使用されることを解明した。実際の用例に基づく好ましいことと、好ましくないことの度数順位を提示することにより、「<動作主>が<対象>から/の足を洗う」という文型をとる場合、「足を洗う」とよく共起する<対象>を見出した。

第6章では、「まんじりともせず」の構成要素「まんじり」がどのような意味・用法を担っているのか、それが類義語「まじまじ」の意味・用法とどう関連するのかを明らかにすることにより、「まんじりともせず」が慣用句として成立した理由を通時的に考察した。結果として、多義性をもつ「まんじり」は「まじまじ」との意味分担を有しつつ、多義性が解消され、否定形式の動詞と結びつき、「まんじりともせず」の形で定着したことを解明した。それにより、ある言葉は特定の意味内容と表現形式に多用されると、慣用句の構成要素として限定されやすい、という見解を提示した。

第7章では、これまでの慣用句に関する研究、特に日本語の慣用句を外国語の慣用句と対照した研究は、教育現場から問題点や研究課題のヒントを得てきたが、一方で研究成果を教育現場に還元し、学習者の慣用句習得や日本語教師の慣用句指導に役立てる試みはまだ十分になされてきたとは言いがたい、ということを指摘した。そこで、日本語教育現場に存在する問題点を意識しながら、コーパス利用による慣用句意味記述の有効性を提案し、学習者用の慣用句辞典項目を試作した。

結論では、本論文をまとめるとともに、今後の課題と展望を記した。